



教職大学院 Newsletter

No. 144

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2021.4.22(公開版)

南の島、沖縄県宮古島と連携協定を結ぶ

福井大学連合教職大学院東京サテライト 特命教授 福島 昌子

令和2年(2020年)12月17日に沖縄県宮古島市教育委員会(宮國博(元)教育長)と福井大学連合教職大学院(柳澤昌一研究科長)の「連携協定締結式」が、宮古島市役所城辺庁舎で行われました。そこには、福井大学からは柳澤研究科長をはじめとし、木村優准教授と協定締結に至るまで双方をつないできた福島が、そして、宮古島教育委員会からは(元)宮國教育長、上地昭人教育部長、平良(元)宮古教育事務所長が同席をしました。その様子は「宮古新報」「宮古毎日新聞」の二社で報道され、宮古島民報テレビのニュースでも放送されました。

宮古新報-教育-「市教委、福井大学連合と協定」
2020/12/18



連携協定を締結した宮國教育長(左)と柳澤研究科長(右) =市役所平良庁舎=

宮古島は、沖縄本島から南西約300km、東京から2000km離れたところに位置し、宮古諸島(宮古島、池間島、来間島、伊良部島、下地島、大神島、多良間

島、水納島)の中の主島となっています。人口は約55000人、総面積は沖縄本島の13分の1といわれ、島全体がおおむね平坦で広大なサトウキビ畑が広がり、海岸線と白い砂浜、珊瑚礁の海中景観など豊かな自然に恵まれています。また、国内最大のサンゴ礁群「八重干瀬(やびじ)」が有名などころでもあります。その南の島、宮古島と昨年度の12月に東京サテライトを拠点とするということで連携協定を結びました。

宮古島市教育委員会は、連携協定締結に踏み切った理由を、①教職員の資質能力、向上及び相互の人的・知的資源の交流・活用を図る、②学校教育上の諸課題の適切な対応、③宮古島市の教育充実・発展につなげることの3つをあげ、協定締結式で、宮國(元)教育長は次のように述べられました。「宮古島市は学力向上、教職員の資質向上、小中一貫教育研究の充実を図ることを考えている。そのために福井連合教職大学院東京サテライトに教諭、管理職、指導主事など多くの研修派遣を行いたい。今後、研修派遣生をどう募集するかという課題はあるが、しっかり取り組んで将来の宮古教育を整えたいと考えている。」と強い

内容

- 巻頭言 (1)
- 退任の挨拶 (3)
- 長期実践研究報告会のふり返り (9)
- 2月ラウンドテーブルのふり返り (16)
- マネジメントコースだより (23)
- 『教師教育研究』を読んで (27)
- 2021年度年間計画 (29)

期待を述べられました。

柳澤研究科長からは「これからの時代の要は教育である。それには、これまでの伝統的学習では立ち行かなくなる。宮古島で教育委員会が基礎を支えながら連動してチャレンジし、福井大学連合教職大学院と協働で取り組むことで、一つの展開の切り口を与えることになる。また、それが新しいモデルをつくることになり、これからの時代の基盤は地域の知的力も求められる。宮國教育長さんに提起いただいたことは、教職大学院の目指すことと一致している。これから協働を進めることを楽しみにしている。」と述べられました。

次いで、私（福島）と木村先生とで、連合教職大学院の拠点校方式である「学びの転換を支える組織改革の実現」や「世代をつなぎ、学校の実践と研究を促進することを働きながら実現するシステム」について説明をしました。それについては二社の新聞社でも取り上げられ、連携協定締結式を終えて柳澤研究科長、木村先生が福井に戻られた翌日に一人で宮古島の4つの高等学校を訪問したところ、どの学校も新聞記事（朝刊）のコピーを手にもって出迎えてくださり、各学校の校長先生から大変興味深い眼差しで質問を受けました。そして、職員会議で先生方に連合教職大学院について紹介して下さることになり、とてもありがたく、本大学院の「学びのネットワーク」が全国に広く展開されていくことを嬉しく思いました。

昨年度の第3回入学選抜で宮古島市狩俣小学校教頭の下地美和子先生が学校改革マネジメントコース

に合格され、4月から東京サテライトを拠点として、連携協定第1号として派遣されることになりました。嬉しいことに他に宮古島諸島の多良間島からも多良間中学校の上里公人先生がミドルリーダー養成コースに合格され、東京サテライトで学ばれます。また、今回の連携協定の締結にご尽力くださった宮古島市教育研究所の平良善信所長（元、沖縄県教育庁宮古教育事務所長）さんに宮古島地区のコーディネーターサーチャーを依頼し、宮古島諸島の先生方をサポートしていただくことになりました。平良所長さんは、福井の学びシステムを島しょに導入し、宮古島の教員研修の在り方を転換していく方向で、新教育長の大城氏と共に臨みたいとおっしゃられています。

せっかくのこれらの機会を生かそうと、東京サテライトでは、2021年度の夏期 cycle 2 を宮古島に会場を移し、東京サテライト院生14名と宮古島から参加される先生方と共に学び、集中 cycle 終了後に、島内教員対象の「宮古島ラウンドテーブル」を市教育委員会、同教育研究所と東京サテライトと共催で開催することになりました。

こうして遠く離れた地域の教育を共に共有し、多種多様多層の学校種の先生方とで学び合う機会を得られたことは、福井連合教職大学院にとっても大変ありがたいことと思います。東京サテライト院生のみならず、福井、奈良、岐阜の院生の先生方とも共に学び合える機会が増えることを楽しみにしております。

以上、宮古島との連携協定の締結についての報告とさせていただきます。



退任の挨拶

※所属は2020年度のものです

あつという間の…

福井大学大学院連合教職大学院・客員准教授(福井県教育総合研究所) 朝倉 智子

着任のご挨拶をしたのがつい昨日のこのようですが、この春の人事異動により、福井大学教職大学院のスタッフを退任させていただくことになりました。短い間ではありましたが、いろいろとお世話になり、本当にありがとうございました。

教員になって初めて学校現場を離れ、福井県教育総合研究所に勤務して2年、担当業務が1年ごとに変更になったこともあり、新しい体験ばかりの毎日だった気がします。新鮮に感じることも、これまで経験したこともない仕事に目を開かれることが数多くありましたが、時には、「私は教員だったよね？」と再確認したくなったり、自己肯定感を粉碎された気分を味わったりすることもありました。特に今年度はコロナ禍が加わって、学校現場に関わる機会も激減してしまいました。そんな中で、この教職大学院の仕事は、自分が教員であることを実感できる貴重なものだったと感じています。月間カンファレンスやラウンドテーブルで、県内外の先生から様々なご体験や学校の現状を伺うことは、とてもよい勉強になりました。また、FDや集中講座で大学院の先生方の知見をいただいたり、先生方や院生の皆様と一緒に難解な学術書を読み解いたりすることは、(頭が悪くなったなど反省しながらも)充実した時間で、学生に戻ったような気分も味わえました。本当によい経験を

させていただきましたし、教職大学院での仕事が日常の業務の励みにもなっていたと感じています。私は、この春から、福井市清水中学校で教頭として勤務することになりました。新採用以来高校でしか働いたことのない私が、中学校で管理職を務めるということで、不安がないと言えは嘘になります。しかし、楽観的に過ぎるかもしれませんが、現場に戻るワクワク感も同時に感じています。この2年間、教育総合研究所で、そしてこの教職大学院で、小中学校の先生方と数多く関わらせていただけたことが、私の大きな支えとなっています。もしこの2年間がなかったら、今はきっと不安ばかりが募っていたことでしょう。

着任のご挨拶の中で、教育に対する見方の転換をはかっていかなければならないと感じた経験について書かせていただきました。「ビフォー・アフター」ではありませんが、行政での2年を経て現場に戻ること、自分自身の変化を感じてみたいという興味もあります。これまでの経験の中で自分が得たものを次の職場で生かし、中学校・高校・行政の「良いところ取り」を目標に頑張りたいと思います。

4月からは、目の前の生徒のため、そして勤務校の先生方のため、精一杯働きたいと考えています。教職大学院の皆様には、これからもお世話になることがあると思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

子どもに寄り添える教員を目指して

福井大学大学院連合教職開発研究科・准教授 新井 豊吉

院生の皆さんとはあまり膝を突き合わせて語りあうことも少なかったのですが、この場を借りて、皆さんへのわたしなりのエールを退任の挨拶に代えさせていただきます。

わたしは45年も前に学部・大学院で、今でいう特別支援教育を学び、東京都立特別支援学校の教員を定年まで勤め、その後福井大学で教鞭をとる幸運にめぐまれました。大学教員に応募した理由は、教員として採用されてからではなく、学生時代に徹底的に「子どもの味方になる」ことの大事さと困難さを学ぶ必要性を痛感したからです。皆さんは、そんな当たり前のことと思うことでしょうか。しかし、これが実はかなり大変なことです。そうでなければ、毎年同じような体罰事件やいじめに対する不適切な指導は起こりません。特別支援学校は複数担任です。新採教員が初々しく「何もわからないので教えてください」と挨拶した3か月後に、子どもを理不尽に叱咤する姿を見たことがあります。それは一緒に組んでいる先輩教員から、なめられないようにと教わった結果でしょう。または、悪いことはしっかりと叱るようにと教えられたのかもしれませんが。日ごろは子どもに優しい若手教員が、文化祭の時に緊張で舞台上がることのできない子どもを脅している姿も見つかります。おそらく練習ではできていたのに、本番で成果を保護者に見せることのできない焦りがあったのでしょうか。または舞台上げられないことで周囲から力のない教員だと思われることを心配したのかもかもしれません。例えばこんな例はどうでしょうか。皆さんが教育現場にでたときに、学年に力で生徒を抑える不適切な指導をするベテラン教員がいたとします。皆さんはどうしますか。その教師を反面教師として自分だけはそうならないように気を付けますか。先輩教師や管理職に相談しますか。日々苦しんでいる子どもがいるという現実をどのように受け止めて行動しますか。「子どもの味方になる」ことはきれいご

とではできないのです。専門性はもちろん勇気も必要です。時として、子どもの味方になることで孤独になるかもしれません。しかし、時間はかかりますが必ず理解者は増えていきます。わたしが皆さんに伝えたいことは、現実を直視したうえで本気で「子どもの味方になる」と言ってほしいということです。子どもは教員の本気度を見抜きます。もうひとつ専門性の話をします。子どもに寄り添うには専門性が必要です。よくある話として理解言語の乏しい自閉スペクトラム症の子どもに、やさしく丁寧に語りかけ続けてパニックを誘発する教員が一定数います。コミュニケーションは話し言葉だけだと信じて、心から語りかけ続けられれば理解してもらえると信じているからです。これは虐待であり、寄り添うことを勘違いしている典型例です。皆さんが文化も言語も違う未開の土地に一人で行った時のことを想像してください。現地の方がしきりに何かを語りかけてきたとしましょう。最初はなんとかコミュニケーションをとろうとするかもしれませんが、そのうち恐怖感をもち、その人が近づいてきたら避けるようになると思います。なぜ避けるようになるか。それは理解できないからです。しかし、相手が食べ物の実物を持ってきて差し出してくれたらわかりますね。または食べる動作をしてくれたらもっとわかりやすいですね。笑顔で食べる絵を描いてくれたら最高ですね。つまりどのような方法ならば楽に相手に伝わるかを理解し、実行できること、これが専門性です。その人の発達、障害特性、性格、精神状態、体の動き、その他をアセスメントする力が必要です。その結果その子に対するアプローチはその子だけのアプローチの仕方になります。寄り添うということは、理論を含めた専門性と多くの引き出しをもち、そこから使えるものを取り出し、その子用にカスタマイズして「これでどうだろうか？これがあなたの成長の手助けになるだろうか？」という姿勢で慎重に歩み寄りという行為です。決し

て「これでわかるだろう。わからなければわかるまでこの方法でやっていく」というものではないのです。時折、皆さんから「叱るにはどうしたらいいのか？」「いつになったら一人前の教員になれるか？」と聞かれることがあります。教員という仕事は一生子どもへのアプローチを模索しつづけるものです。なぜならば目の前に現れる子どもはある種のタイプ分け

はできるものの、常に一人しかいいない存在だからです。したがってベテランになればなるほど教員は人間の奥深さを知り、謙虚になっていくものです。繰り返します、目の前の子どものために行動するためには覚悟と専門性が必要です。いつでも応援しています。

新たな出会いのなかで

福井大学大学院連合教職開発研究科・准教授 谷 裕子

教職大学院の谷です。今年度、ご縁があり教職大学院に育休代として勤務させていただいておりましたが、3月をもって1年間の任期を無事に終えることが出来ました。ひとえに皆様のおかげと感謝しております。ありがとうございました。

着任のご挨拶にも書き、様々な場面でも話しておりましたが、私は約40年間幼児教育の現場で働いてまいりました。いただいたこの機会に幼児教育の現場に行きその保育を見、先生方と語り合うことが出来ることを楽しみにしていたのですが、コロナ禍の中、当初は中々それもままならずどのように対応したらよいかも分からない状況でした。現場人間の私が、現場に行かずしてなにが出来るのだろうか。しかし出来ることをするしかなく、全く未知なZoomというものとの出会いにも戸惑いながらも、周りの先生方に教を請いなんとか1年が終わりました。皆さんに励ましていただき、教えていただき、些細な業務にも「ありがとう」「助かりました」などの言葉をいただいたりしたおかげだと本当に感謝しております。それ故に私自身は管理職だった時、職員の困り感を見ようとしていただろうか、彼らの分からなさを理解し、その困り感を助けてきたらどうか、そして出来るようになったことを認めてきたらどうか、そんなことも反省させられたのでした。今更ながら「人を

育てるのは人なのだ」と自分自身をもって感じた1年でした。

カンファレンスはいつも緊張して臨んでいたように思います。しかしその時間は私にとってどれも貴重で有意義なものでした。緊張の中にもとても楽しい時間であり、院生の皆さんや、異業種の先生方から学ばせていただくことが多く、新しい知識や感動に出会い、自分自身が学び続けなければならないと強く感じたのも確かでした。カンファレンスの中などで現場の先生方が悩み、迷っておられることを聞かせていただくことも有りましたが、それこそ真摯に子ども達に向き合っているからこそその悩みであると、ありがたくそして頼もしく感じていました。上手な授業や正しいやり方はあるのかもしれませんが、でもそれより何より大切なことは目の前の子どもの目でしっかり見て、理解しようとする事だと私は思うのです。答えは出せませんが、話をすることで自分の中の考えが確信となっていったり、異なる考え方が芽生えることも有るでしょう。今後もそんなふうに対話をする事が出来ればと思います。

この度、常勤としては退職いたしますが、4月からはコーディネーターリサーチャーとしてお世話になることになりました。引き続き一緒に学ばせていただく機会をいただきありがとうございます。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

A Journey of Learning, Unlearning and Relearning through Community and Reflection

Pauline Anne Therese M. Mangulabnan

The last six years, two years as an international student and four years as a staff, had been nothing less than a learning journey for me. I entered the University of Fukui as a student with my experiences as a Math teacher, teacher trainer, and school principal; and here I am bidding farewell as a renewed teacher, learner, and professional. I have had the opportunity to teach junior high school students with Japanese teachers. I was able to assist and lead international teacher professionalism knowledge co-creation workshops. I was lucky to have crossed paths with international educators and learned from them. I was blessed to have worked with some really amazing people from all over the world. With that said, words are not enough to express my gratitude to every soul with whom I, directly and indirectly, interacted in the last six years here in DPDT.

The journey was a spiral of learning, unlearning and relearning through community and reflection. As I learned Japanese and words in the classroom, I was simultaneously unlearning my expectations of teachers towards student learning to relearn the meaning of listening to students. To relearn about collaboration, I was unlearning my prejudices of the structures of conversation which is crucial in transforming myself as a facilitator. As I learn to be a facilitator of local and international workshops, I had to relearn impartialness and cultural openness, i.e., cross-cultural learning is a two-way process of learning and unlearning. Learning with the international community, especially with our African partners, I relearn the main purpose of public education and unlearn cultural prejudices to

appreciate the efforts put into one's education. To relearn about organizational structure, I learned the relevance of starting with 'three seeds', which is basically to start by understanding the basic underlying assumptions of a person or a cohort or an institution to find critical points for metamorphosis and the need for such. It is through unlearning that I get to understand my mental models to be able to embrace DPDT's vision and principles. And this iteration of learning, unlearning and relearning was made possible by opportunities for individual and community reflections in DPDT.

DPDT has instilled in me the importance of a learning organization -- at a micro and macro level. A learning mindset of an individual, inside or outside the school, enables one to dynamically interact with the environment, including people and concepts, to ensure growth and progress towards a vision. At an institutional level, being a learning organization gives direction and support for the system to manage to grow like a living organism with equal respect both to individual and communal interests. Such ideals merge into school reality through lesson study which is abundant in communication, reflection and community. It is through public dialogues that we learn new ideas beyond our experiences. It is through reflection that we decipher the things that have to be unlearned. It is through the community that we relearn what is essential and needed. All these can be manifested in practice records. And the same process, with these elements, is how I believe learning in different forms should be.

As I start my new post at Fukui College, it is my intention to bring with me the idea of learning, unlearning and relearning in my own professional development and learning design for my students. I am both excited and nervous to be in the classroom while doing research. I feel excited because I will be able to follow students and their process of learning for at least one complete year. On the other hand, I am nervous about the slightest possibility of not being able to deliver what is just for my students. However, with sincere communication, constant reflection and

a supportive community, I am confident that I will continue to grow with my students and other partners. As I bid farewell, I go back to what I had written in my first newsletter article, an educator is someone who teaches minds, touches hearts and transforms lives -- with everybody on board.

Thank you for a wonderful learning experience, DPDT. I cannot wait to see everyone again in the roundtable -- this time, sharing my own reflections and practices. Maraming salamat po.

コミュニティと省察を通じた 学び、学びの棄却、学び直しの旅

マグラブナン ポリン アンナ テレーゼ マラヤ

これまでの6年間、つまり留学生としての2年間、スタッフとしての4年間は、私にとって学びの旅に他なりません。私は、数学の教師、教師のトレーナー、校長としての経験を生かして、福井大学に院生として入学しました。そして、今、私は新たな教師、学習者、そして専門家として別れを告げます。私は、日本人の先生たちと一緒に中学生を教える機会を得ることができました。教師のプロフェッショナルリズムに関する知の共創の国際ワークショップを支援し、リードすることができました。私は幸運にも国際的な教育者と出会い、彼らから学ぶことができました。私は世界中の本当に素晴らしい人々と一緒に仕事することに恵まれました。それでも、ここ教職大学院でこれまでの6年間に直接的または間接的に交流したすべての方々に、感謝の気持ちを表すのに十分な言葉は見つかりません。

この学びの旅は、コミュニティと省察を通じた、学び、学びの棄却、学び直しのスパイラルでした。教室で日本の言葉を学ぶことと同時に、生徒の話に耳を

傾ける意味を学び直すためには、生徒の学びに対して、私が教師というものに持っている期待を捨て去りました。協働について学び直すためには、ファシリテーターとして自分自身を変革するために重要な会話の組み立てに対する偏見を捨て去りました。地域のおよび国際的なワークショップのファシリテーターになることを学ぶにつれ、公平性と文化的開放性を学び直す必要がありました。つまり、異文化交流学習は学びと学びの棄却の双方向のプロセスなのです。私は国際的なコミュニティ、特にアフリカのパートナーと共に学ぶことで、公教育の主な目的を学び直し、さらに人々の教育にかける努力のすばらしさを知ること、文化的偏見を捨て去ります。組織構造について学び直すためには、「3つのタネ」から始めることの意義を学びました。これは、つまり、変容の重要なポイントとそのための必要性を見つけるために、個人、コホート、または組織の根底にある前提条件を理解することから始めるということです。自分の学んできたことを捨て去ることを通じて、私は、教職大

学院のビジョンと原則を受け入れるために、自分のメンタルモデルを理解できるようになりました。そして、この学び、学びの棄却、学び直しのインタラクションは、教職大学院での個人的およびコミュニティでの省察の機会があったからできました。

教職大学院は、ミクロおよびマクロレベルでの学習組織の重要性を私に教えてくれました。個々人の学びへの向き合い方によって、学校の内外を問わず、個々人は、人々や様々な考えも含め、環境とダイナミックに影響し合うことができ、ビジョンに向けて確実に成長し進歩することができるのです。組織レベルでは、学習する組織であることが、システムの方方向性とサポートを提供します。それによって、システムが、個々の関心とコミュニティの関心を同等に尊重しつつ、生き物のように成長できるようにするのです。このような理想は、コミュニケーション、省察、コミュニティに富んだ授業研究を通じて、学校の現実に融合していきます。私たちは、パブリックな対話を通して、経験を超えて新しいアイデアを学ぶことができます。私たちは、省察を通じて、今まで学んできた事柄で何を捨てないといけないのかをはっきりさせることができます。私たちは、コミュニティを通じて、私たちにとって本当に大切に必要なるものを学び直すことができます。これらすべては、実践記録の中で表されているはずで、そして、これらの要素を

備えた同じプロセスが、異なる形でも学習のあるべき姿だと私が信じている方法なのです。

福井高専に着任するにあたって、私自身の専門職としての成長と学生のための学習デザインにおいて、学び、学びの棄却、学び直しのアイデアを持って行こうと思います。研究しながら同時に教室にいることに、興奮もするし、緊張もしています。少なくとも丸1年間、生徒とその学習プロセスに寄り添えるようになるので、わくわくしています。一方で、生徒たちが求めるものを届けることができないのではという一抹の不安もあります。しかし、誠実なコミュニケーション、継続的な省察、そして協力的なコミュニティにより、私は生徒や他の仲間たちとともに成長し続けられると確信しています。お別れのご挨拶に、私が最初のニュースレターの記事に書いたことに戻ります—教育者とは、そこにいる全ての人たちと、心を教え、心に触れ、人生を変える人です。

教職大学院、素晴らしい学びの経験をありがとうございます。ラウンドで再び皆様にお会いできることを楽しみにしております—その時には、私自身のふり返りと実践を共有しますね。どうもありがとうございます po。

長期実践研究報告会に参加して

※所属・学年等は2020年度のものです

長期実践報告会に参加して

学校改革マネジメントコース1年/美浜町立美浜東小学校 大野 靖幸

教職大学院に入学して早一年が過ぎようとしている。この一年は、コロナ禍ということもあり、学校現場では、先行き見通しがつかない状況が続いた。その中でも、毎月のカンファレンスで校種は違え、いろいろな情報を共有できたことは、私自身の心の拠りどころとなったことは間違いない。

そのような状況の中、試行錯誤を重ねながら、進められた長期実践は、まさに柳沢先生が語っておられた『プロセスを歩いていくスキルがないと一人一人の成長を捉えることができない。』を体現しており、すばらしいものばかりだった。

わたしのグループでは、成器南小の前川先生と若狭高校の兼松先生の報告があった。

前川先生の報告では、行政という職種を経験したことで見えた業務管理の在り方や働き方改革に対する意識改革などの内容に、管理職としてあるべき姿を具体化することができた。その中でも管理職が、ゆるいコミュニティの中に積極的に入っていくことで、それぞれの教員が成功体験を積み重ねられ、教員どうしのつながりがより深いものになっていくという内容に共感した。トップダウンのリーダーではなく、様々な教員の考えを吸い上げ、つないでいくコーディネーター役としての管理職の役割が今後さらに重要視されていくと感じた。

兼松先生の報告では、探究的な学びを進めていく上で、生徒自身が課題を見つけP D C Aを回していくかについての実践があった。報告の中であった目標やゴールが明確になっていないと、活動自体が無駄になってしまうといった内容や苦しい中でも、行う主体的な活動こそが充実感に変わり、それが生徒自身の印象に残っていくという内容が心に残っている。私自身の長期実践のテーマは「つなぐ」である。総合的な学習の時間を中心とした「人とのつながり」そして「地域とのつながり」を達成するためのコミュニティづくりである。探究的な活動を組み立てていくことは、一朝一夕には、できない。兼松先生の報告のように、探究のプロセスを支える焦点が定まったコミュニティづくりに励みたいと感じた。

新学習指導要領が改訂となり、教育は大きく変わろうとしている。これまでは正解があるものをどうこなしていくかに重点が置かれていた。けれど、これからは正解がないものとどう向き合っていくのかといった過程の部分が大切になってくる。今後も教職大学院と学校現場で、理論と実践を往還させていくことで、一年後の今、「つなぐ」をテーマとした実践の成果が自分の長期実践記録に書くことができるよう努めていきたい。

「日常」と「非日常」を思索した先に

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学附属義務教育学校 仲村 俊太郎

コロナ禍によって世界の日常は失われました。突如として、子どもたちの「日常」が「非日常」になったのです。この状況の中で、学校はどうあるべきか、

教師として何をすべきなのか考えてこられた先生方は多いのではないのでしょうか。今回の長期実践報告会では、先生方の苦悩や実践したことを踏まえ、学

校・教師の存在意義とは何か、その答えを示唆する内容が多く見受けられました。そこで、報告会のグループセッションで取り上げられた「教師と子どもの関わり」の視点で考察したことをご紹介します。

非日常における「教師と子どもとの関わり」という視点が出てきたのは、春先の休校していた時期に、教師と子どもとの距離が疎遠になっていたことに課題意識を感じたという話がきっかけです。子どもに会えず、何もできないという後ろめたさ、でも何かしないといけないとい焦燥感から、教師としての在り方を問い直したというお話でした。このお話から、そもそも教師って何のためにいるのか、子どもたちとの関わりで本当に大切なこととは何なのかという命題を突き付けられました。

では、「教師と子どもとの関わり」の意義とは何でしょうか。その足掛かりとして、学校が再開して数か月が経った時に、ある先生が「例年よりも、子どもたちが落ちついて学校で過ごしている。」とおっしゃっていました。その理由は、コロナによって課外活動や学校行事が減った分、その準備や運営に使っていた時間が減り、子どもと関わる時間が増えたからではないかとのことでした。きっと多くの先生方が、休校中で深められなかった子どもとの信頼関係を築き深めようと、子どもとの関わりを大事にされた結果なのではないでしょうか。このことから、「教師と子どもとの関わり」の意義とは、子どもが安心して学校生活を送ることと言えます。また、教師と子どもたちと

いった信頼関係が学校生活すべての本質なのだと考えさせられます。さらに、これまでの内容を俯瞰して考えてみると次のことも言えるのではないのでしょうか。本来の日常では行えなかったことが、非日常を日常に戻そうという教師の営みによって、よりよい日常をもたらしているということが「教師と子どもとの関わり」において起きています。つまり、非日常をマイナスに捉えるのではなく、プラスに捉えることで、日常をよりよいものにできるということです。未知の課題に対して、いかに解決し、よりよい社会・生活を実現する力が、これからの時代に求められることを踏まえると、コロナ禍だからこそ、子ども自身も「非日常をよりよい日常に転換させる力」を高めていけることができるきっかけが多いのではないかと思います。

やや内容が膨らんでしまいましたが、長期実践報告会を通して、「日常」と「非日常」を思索してみました。その先にあったことは、「非日常をよりよい日常に転換させる」ことで、子どもたちにとってより安心・安全の学校に繋がり、また、これからの社会に求められる力にも繋がるということでした。また、どのような方法を取ろうとも、本質は変わらないでしょう。いま「非日常」だからこそ、大切なことを考えることができた実感させられる長期実践報告会でした。最後になりましたが、同じグループだった先生方、示唆に富んだお話を頂き、誠にありがとうございました。

長期実践研究報告を書き終えて

ミドルリーダー養成コース(1年履修)／福井大学教育学部附属特別支援学校 加藤 真由

福井大学連合教職大学院での1年間を終えようとしています。

新型コロナウイルス感染症の世界的流行による、臨時休校と自粛生活から始まった1年。予測できない状況の中、私は「今年度の実践は何も積み上がらないのでは」と焦り、次第に「そもそも子どもの学びは

どうなるのだろう」「学校の役割って何?」「子ども達が学校に来られない中での、教師の役割は? 養護教諭の役割とは?」という根本的な問いに迷い込んでいきました。しかし、毎月のカンファレンスに参加していく中で、困難な状況であるからこそ、教職大学院で学ぶ価値を感じ始めたのです。それは、根本的な

問いに陥ったからこそ、これまでの在り方を問い直す作業がより深まり、多くの先生方と同じ方向を向いて語り合うことが出来るのではないかと気づいたからだと思います。コロナ禍で、失ったものも沢山ありますが、得たものもあった…少なくとも私の教職大学院での学びは充実したものになったのだと、はっきりと感じます。

長期実践研究報告を書き記すことは、これまでの自分自身の歩みを見つめ、疑い、問い直す作業でした。養護教諭としてのその時々自分と向き合うことになり、時には蓋をしてしまいたいほど辛く、苦しくなり、時には昔の自分に励まされながら書き進めることとなりました。自分史のようでもあり、実践記録のようなものでもあり、論文のようでもあり、様々なものが織り込まれたような報告になっています。

自分の養護教諭としてのアイデンティティは、どのような出来事を経て自分の中にあるのか、時系列で書き進めながらも、ただ羅列していくのではなく、その出来事が自分にとってどのような意味を持っていたのか、ストーリーを紡ぐように書き進めることを意識しました。

本報告の結びにも書いたのですが、一つの省察を掴むのにあんなにもがき苦しんだはずなのに、振り返ろうとするともう掴む前の自分には戻れない、あたかも最初から省察を掴んでいたように書いてしまうということを何度も経験しました。揺れや迷い、葛藤、失敗こそが次につながる貴重な経験であったことを実感し、その当時何を考えていたのか、詳細な記録をとっていなかったことを悔やみました。また、改めて記憶や記録を辿り省察しなおすことで、当時は見えなかったものが見えてくることもありました。

そのような過程には、カンファレンスで先生方と実践を語り合い、問い直されることで学びが肉付けされていく時間が欠かせませんでした。全く別のものと捉えていた出来事が、カンファレンスでの気づきによってつながり、自分にとってどのような意味をもっていたのか、ようやく理解するということがありました。

そして、エピソードを思い返しながらかき進めていくうちに、今更ながら、これまでいかに多くの子ども達や保護者、先生方に支えられて養護教諭をさせてもらっていたかということがよくわかりました。

こうして執筆し終えて、何が入学前と変わったのだろうか、自分に問いを投げかけた時にはっきりと答えは出てこないかもしれません。ただ、これまで自分が何を大事に養護教諭としての営みをしてきたのか、それはどういったストーリーを経て自分の中に育ってきたのか、そういったものが山稜のように、見えるようになった気がします。そして、書き終えた今はひとつ大きな頂にたどり着いたようでいて、しかし次に新たに挑むべき別の頂がうっすら見えているような、そんな感覚です。

これまで、多くの先生方の長期実践研究報告を読み、他者の経験を追体験しながら、そのプロセスを共にすることで学びを得てきました。それと同様に、拙いながらも自分の書き記したものが、他の先生方のお役に立てる日が来れば幸いです。

最後になりますが、同志の先生方や教職大学院の先生方、進学に背中を押してくださった管理職の先生方や同僚の先生方…支えてくださった皆様に心より感謝を申し上げます。

学び合い、自分のものに

学校改革マネジメントコース1年／福井市安居中学校 伊部 雅之

柳澤先生の「長期実践研究を読み合うことの意義」についての話から始まった長期実践研究報告会であった。正解があることをいかにたくさん解けるかと

いうこれまでの学習観から、ない正解に対して、その正解を見つけようとするプロセスを大事にしていくというように学習観が転換したからこそ、自分自身

が経験して、自分自身を発展させていくことや、同士（同僚）の経験を聴き、それを自分のものにしていくことが重要であるとのことであった。

私は、上板橋第二中学校の大野先生、西津小学校の梶川先生と同じグループで、お二方の長期実践研究を聴かせていただいた。特に上板橋第二中学校の大野先生の長期実践研究については、大野先生が、同じ社会科であることや3年担任、そして研究主任、副主任というように自分と重なる部分が多かった。大野先生が実践された研究会で、他の先生方の理解と変容を実感するまでの苦労や、総合的な学習の時間における学年教員の意思統一など、パワーポイントでは見えない部分があったに違いないと思った。自分も同じような苦労をしてきたわけであるし、上板橋第二中学校の方が規模は大きいからなおさらである。大野先生の報告を聴いて感じたことは、教職大学院でのセッションを通して学んだことを「自分の学校でも取り入れてみよう！！」とする柔軟さを強く感じた。そのような姿勢は教師として大事な要素であると考えます。

今年度、本校の修学旅行は、コロナウィルスの影響で県内の小浜市になった。当初の予定であれば東京方面に行き、上板橋第二中学校に訪問させていただくことになっていた。同じ教科センター方式の学校として、生徒同士が「学校の資源」について話し合いができればと考えていたのである。今回同じグループになり、上板橋第二中学校での実践を聴き、改めて訪問できるとよかったなあと思う。

2人目の梶川先生は、これまでの教員人生を振り返っての内容が中心であった。小中の学校勤務や地区の区長さんを務め、さまざまな経験が教師としての自分の実践に生きているとのことであった。

私はこの1年間、この長期実践研究報告会だけでなく、月毎のセッションや集中講義等で様々な実践を聴いてきた。教師として「受け入れる柔軟さ」「実践してみる大胆さ」が大事であると思うようになった。私はまだ1年ある。教職大学院での学びから、いろいろなことを考え、それを安居中学校にどのように還元できるかを意識していきたい。私が学び、考え変わっていくことが、生徒にとっても必ず+になると信じている。

長期実践研究報告会を終えて

学校改革マネジメントコース1年／越前市武生西小学校 川端宏明

「もっと語り合いたかった！」終わってすぐ、そう思いました。午前中の3時間では、お二人の実践報告をお聞きし、意見交換するには時間が足りなさすぎました。興味深い話も多く、報告資料の文字には表れない、その実践時の心情など、いろいろとお聞きしたいことは多かったため、残念で仕方ありません。さらにオンラインという対話のしづらさもあって、深い学びまで辿り着けたのか……。何より、これまで長い時間をかけて、全身全霊で長期実践研究報告を書き上げた先生方に対して、特に何が言えたかはともかくとして、時間がなく、まともに感想すらお返しすることが出来なかったことは、とても失礼である気がして、心苦しかったのが正直なところです。

今回報告を聞かせていただいた先生は、授業研究・教職専門性開発コースの三村先生と、学校改革マネジメントコースの向井先生でした。三村先生は、附属義務前期におけるインターンの経験から、「子どもを見取る」大切さに気付かれます。来年度、新採用として現場で勤務されるということであったが、現場に出る前にその大切なことに気付かれた三村先生は、きっと今後子どもたちと有意義な時間を多く過ごされていくのだろうと感じました。ただし、これは向井先生からご指摘があったのだが、見取った見取りが間違っていると、その後の支援が空振りに終わり効果が上がらないばかりか、場合によっては悪い方へ進んでしまうことも起こりうる。このことは「プロサ

ス・コンサルテーション」に書かれており、我々教師は常に注意しなければならないことだと再認識しました。しかしながら、教師の考えや価値観を一方向的に押し付けるのではなく、子どもたち一人一人をしっかり見取り、その子にあった支援を、という視点が大切なことであることに変わりはないということにも、改めて気付かせていただきました。

向井先生は、「越廼PR」に取り組んでこられた5年間の歩みと、そこから見えてきた組織マネジメントについて自己を深く客観視し、そして理論的に考察されていました。向井先生は、「問い」を大切にされており、ご自身の問いを管理職や同僚の先生方、子どもたちや地域の方々と共有していくとともに、活動が発展していく様は圧巻でした。また、組織マネジメントに関する後半部分に関しては、自分の中でぼんやりしていたことを、明確に言語化してくださっており、「なるほど、そういうことか。」「そうそう、そういうことが言いたかった。」と膝を打つ場面が多く、まさに、「理論と実践の融合」の発表を聴かせていただきました。先生方と問いを共有し、活動をみんな楽しんでいける職場環境づくりは、自分のテーマに通じます。向井先生からいただいた発表資料に書かれている言葉の数々は、きっと次年度に私自身が実践をしていく上で、とても大きな指針になると感じました。

お二人の先生方の報告をお聞きして、普段からしっかりとテーマを持って取り組むことの大切さを改めて感じました。我々は、日々目の前の業務に追われ、意識していなければ、子どもたちのつぶやきや反応、先生方とのやり取りなど、本当はよりよい教育環境を作る上で大切なことが、何気なく過ぎ去ってしまうことのなんと多いことか。それらを拾い、集め、実践に繋いでいくためには、自身が明確な「目的」を持ち、「問い」を持たなければ気付かないのだと思います。

さらに、長期実践報告はあくまで我々教員の「途中経過報告」であるとも感じました。当たり前のことですが、我々の日々の実践は、決して長期実践研究報告を書くための実践ではありません。お二人の先生方は、この教職大学院での学びを生かし、4月から現場で新たなスタートを切られることでしょうか。この長期実践研究報告を書きあげたことできっと、教職大学院で学ぶ前と比べて、さらに質の高い教育を子どもたちと実践し続けていかれるのだと思います。私も、もっともっと先を見据え、お二人の先生に負けないように、これからも日々今ある環境の中で、目の前の子どもたちのために悪戦苦闘していきたいと思えます。お二人の先生方、本当にお疲れさまでした。そして、本当にありがとうございました。先生方のこれからのますますのご活躍をお祈りいたします。

長期実践報告会を終えて

ミドルリーダー養成コース2年／岐阜聖徳学園大学附属中学校 小椋 幸美

私は、長期実践報告会で話をするにあたって、教職大学院に入学する前の自分、入学後の自分、1年目の自分、2年目の自分…と改めて振り返ってみました。

私は大学院に通って、さまざまな先生方とお話する中で、「協働」をより意識するようになりました。入学した当初は字面だけの「協働」でした。人海戦術として物理的に人が多ければよりスムーズに進むのだと同じことだと思っていました。

実際に入学する前の実践報告の中の「協働研究・実践の今後の課題」で私はこんなことを書いていました。

現時点では、数学科の教員でティーム・ティーチングを行ってきた。そこでは、T1の教員のサポートとしてT2の教員が入って、知識や技能の習得の援助をすることが大きな目的であった。しかし、数学の問題を解くだけではなく、数学的な思考を身に付け、活用をしていくためには、実生活においてもそれを生か

すことができる本質的な資質・能力が求められる。それを育てていくためには、教科横断をしながらその教科を学ぶ意義や意味を実感することが大切である。今後は、生徒の多様な考え方を生かす、つまり、動機・手段や過程・到達目標等をあらゆる点で個を生かすことが課題であり、T2 の役割もそれに応えるものにしていく必要がある。

簡単に言うと、「T1 のほかに T2 の先生がいるのだから、その先生も意味のある行動をしないといけない。」ということです。そのときの私はその T2 の先生の物理的な動かし方を考えないといけないと思っていたのです。

また、私はずっと「せっかく大学院の行ったのだから、成果を残さないといけない」「ミドルリーダーとしてみんなを引っ張らないといけない」と思い込んでいたところがありました。しかし、その驕った心の行き着く先は「なんでみんなはもっと考えてくれないんだ」「なんでもっと動いてくれないんだ」ということになりかねないと気づきました。そしてうまくいかなかったときの言い訳が「他人が悪い」。こうなってしまうのは、成長どころではありません。

そして、教職大学院で学ぶことによって、精神的なつながりも意識するようになりました。学校に視点を戻してみると、一緒に考えてくださったり、親身に

なって相談にのってくださったりする先生方がいて自分ひとりでやろうとするから苦しいのだとそのとき改めて感じたのを今でも覚えています。また、一つの教育に対してじっくり腰を据えて、一緒に考え、アドバイスをもらい、手探りながらも進んでいくことに楽しさや喜びを感じる瞬間もありました。

さらに、ミドルリーダーということで、強いリーダーシップを発揮する人は2種類の人がいるのではないかと思います。1つは「強い力でみんなを先導する人」です。しかし、この人は自分がすることの責任を自分でとれる強い心が必要です。うまくいかなかったときに他人のせいにするのではなく自分の行動に責任があると認める強さ、さらにはどんな反発があるうとも打ち負かされず進むことができる強さ、こんな強い心が必要だと思います。もう1つは「仲間と手を取り合う人」です。この人はコミュニケーション力と鋭い観察眼が必要です。人材を適材適所に配置し、ときにはモチベーションをあげるためにみんなを鼓舞し、ときにはより適している人を見つけ出して自分は身をひくなど、縁の下の力持ちのような存在だと思います。もちろん、どちらのリーダーも目指す姿へと向かう熱い心を忘れてはなりません。私が目指すとしたら後者かなと思います。本当の意味で「協働」する仲間になっていきたいと思っています。そして、私のこの2年間の学びが自分だけのものではなく、附属中の財産にしていきたいと思っています。

オンライン授業が当たり前になった日常を振り返る

ミドルリーダー養成コース2年/ カリタス女子中学高等学校 小俣 悌彦

1年前の2月、私はM1として長期実践報告会に参加し、報告者であるM2の先生方から集大成となる熱意のこもった発表を聞き入ったのはまだ記憶に新しい。そして、その後始まった臨時休校措置により、生徒が登校しない期間が4ヶ月も続き、その間本校ではZoomを使ったオンライン授業を実施した。生徒の登校再開は7月に入ってからで、しかも、間もなく夏休みに入ってしまったため、学校が始まった

と言えるのは後期のスタートである8月27日とかなり遅い。今年度は中学1年生の担当であり、4月から毎日オンラインで授業を続けてきたのにも関わらず、画面越しに見る生徒の様子と実際に対面している時とのギャップが大きく、一部の生徒については顔と名前がなかなか一致せず、情けないほどであった。

先が見通せない中、走り抜けてきた2020年度であったが、無事にM2としての長期実践報告会当日を

迎えることができた。私の報告書のタイトルは「協働する組織を目指す～ちょっとしたやり取りを大切に～」である。私の教員としてのスタートがいわゆる困難校というタイプで教員が一丸となって生徒に向き合っていたこと、なぜ神奈川の私学の教員がわざわざ福井に行くのだろうかという思い、そして、本校としては2015年から教職大学院への教員の派遣が始まって以来私が5人目であることなどを紹介した後に、この2年の取り組みを報告した。主な柱は3つで、1つ目は英語科教員として中学の授業を担当教員3名とのチームワークで作っていたこと、2つ目は生活指導部として、指導の方向性（ベクトル）を揃えることを目指した試行錯誤について、そして3つ目は教員の同僚性を高め、授業研究を盛り上げていくことを目指してのオンラインでの交流の場 TEA BREAK の開催についてである。この3つともプロジェクトと呼べるほどの取り組みではなかったため、果たして長期実践報告の内容としてふさわしいものなのかは自信がなかった。私が2年前の当初、頭の中に描いていたのは、福井の多くの学校がごく自然に取り組んでいる、異なる教科やキャリアの教員で構成する授業研究グループを立ち上げて、授業研究を学校として盛り上げつつ、生徒理解や教員同士の相互理解を目指せたらというものであった。しかし、実際に年度が始まると、例年に比べて多い授業の種類、校務分掌の仕事もイレギュラーな対応で多くの時間がとられてしまい、授業研究グループどころか、自分の担当する授業に向けて準備をするだけで四苦八苦する毎日であった。それでも「協働」「主体性」というキーワードは常に念頭において、日々の業務に取り組んだ結果、英語科教員としても、生活指導部としても意義のある報告をまとめる所まで至った。

更に、オンライン企画 TEA BREAK は合同カンファレンスなどで多くの共感を頂き、コロナ禍の厳しい状況を乗り切っただけではなく、教員間のコミュニケーションの新しい形を作ることができたことは私にとって大きな収穫となった。

長期実践報告会のもう一人の発表者は丸岡南中の山田先生で、担当教科は私と同じ英語である。丸岡南中は、本校と同じく教科センター方式を採用している他、スクエア制という縦割り方式をとっているという特徴がある。規模や環境などの違いはあるものの、授業研究や、生活指導、同僚性などについては、本校の5年以上先を進んでいるような印象を持った。山田先生の長期実践報告のタイトルは「実践コミュニティとしての民主的 school 組織を目指して」である。本校が改革中の修学旅行についても、「協働」の場としての修学旅行ということで、企画段階から生徒が入り、業者選定のプレゼンテーションにも関わっているというのは驚きであった。

福井で再三、言われてきたのは、「もっと生徒に任せてみたらどうか」という言葉である。何かと教員がお膳立てをし、その分生徒が経験をする場を奪ってしまっていることは度々ある。本校は学校改革に向けて、様々な取り組みをしてきているが、あくまで主役は生徒であることを忘れてはならない。手段であったはずのものが目的にすり替わってしまうなど、「一体どうすればいいのか」という状態に陥ってしまうこともしばしば起こるが、常に原点に立ち返ることが近道なのではないかという思いを強くしている。最後になるが、全国屈指の教育県・福井で学んだこと、身をもって感じたことをこれからの学校づくりに生かしていくことで、これまで支えてくださった皆さんに恩返しをしていきたい。



2 月ラウンドテーブルのふり返し

※所属・学年等は 2020 年度のものです

2 月ラウンドテーブルで学んだこと

授業研究・教職専門性開発コース 1 年 / 福井大学附属特別支援学校 加藤 もも香

2 月 21 日、22 日にラウンドテーブルが開催された。一日目は 7 つのテーマに分かれての Zone Session、二日目は小グループでの Cross Session となっており、一日目、私は ZoneF インクルーシブに参加した。

Zone Session では、まず南雲先生、川崎先生、志田先生の報告を聞いた。南雲先生の報告は、小学校通常学級における子どもたちの学びと学習コミュニティの変容に関するものであった。南雲先生が担任をされた 4 年生のクラスでは、はじめのころは自分から考えを述べるのが少なく、一部の児童しか挙手をしなかったり、目が合ってもそらしてしまうようなクラスであったと話されていた。しかし、授業の進め方や板書の仕方を見直したり、ヒントカードを使用したりすることで、クラスの児童が考えを共有できるようになったという過程が紹介された。授業が、知識を披露する場ではなく考えを共有する場となることで、不完全なところを助け合う関係性が育まれると述べられていた。川崎先生は、「多様性と調和」という題で報告をされた。学校は多様な人がつくるコミュニティに入り込む場であるとし、子どもたちが学校という場で、共生社会、多文化共生、ダイバーシティを創る力(=社会を創る力)を培っていくことが、学校に求められている力の一つであると述べられた。志田先生の報告では、特別支援教育を推進していくために、「寄り添う」と「つなぐ」の二つのキーワードに基づいた実践が紹介された。特に、「寄り添う」の中には「児童に寄り添う」という項目があり、理解授業を行い、障害の有無に関わらずお互いを大切にすることを育成したり、人との関わり方やルール、マナーなど、日常生活を楽しく過ごすための態度を育む

ためのソーシャルスキルトレーニングなどが行われていることがわかった。「保護者に寄り添う」という点では、支援会議を行い保護者の思いを丁寧に受け止めることや、就学時健診の時に特別支援教育についての説明が行われることなどが挙げられていた。障害の有無にかかわらず取り組みが行われていることが印象に残った。先生方の報告を聞き、自分が今まで抱えていた「インクルーシブ教育」のイメージが、かなり狭い視野でしか考えられていなかったことを実感した。インクルーシブ教育と聞くと、今までは障害があつたり、学習や生活に困難さを感じている子どもが通常学級の中で他の子どもたちと一緒に学んでいくにはどうしたらよいか、ということを考えていくことであると思っていたが、今回の話を聞いて、障害がある子や困難さを感じている子に限定したことではないということを感じた。

後半は、特別支援学校における授業実践ということで、附属特別支援学校の小嵐先生の報告を聞いた。中学部での「クラスくらし」というプロジェクト型学習についての紹介であった。動画作りの活動をメインに、一年目は生徒の好きなテレビ番組の内容をまねたもの、二年目はそれぞれがオリジナルの動画を作るというものであった。私は実際にインターシップでこのクラスに入っていたが、クラスくらしの活動を見ることはほとんどできなかったため、生徒たちがこのような活動をしていたということが詳しく分かり、また先生がどのようなことを考えてこの活動に取り組んでいたのか、ということも知ることができた。動画作りを通して、子どもたち自身が得意なこと、苦手なことを把握し、得意なことで活動を進

めていたり、苦手なことのときには助けを求めたりすることで、自然と協力する環境ができており、そのような学習を進めていったことが、特別支援学校

におけるプロジェクト型学習の在り方であるのではないかと感じた。

2021年2月ラウンドテーブルの所感

ミドルリーダー養成コース1年／金沢大学附属高等学校 金森久貴

2月のラウンドテーブルには、2つの大きなトピックがあった。

一つ目は自らの発表。今年一年間の取り組みや、思考の過程を、ナラティブに語る中で、グループの聞き手の方から良いリアクションをいただき、自分自身が整理できていなかった部分の省察を行うことができた。夏季集中 Cycle で行われた理論と実践の往還、「教員にとってどんな状況が自らのパフォーマンスを向上させるか」「職場の潤滑油としての働きを意識化・言語化して、再現可能かつ持続可能なものにする」などの今年の自身の実践と理論について考えたことを、半年後に改めて言語化したことは、私にとってこの半年間の自分自身の受け止め方の変容が感じられて貴重な機会であった。福井教育地域科学部附属中学校の実践「専門職として学びあう教師たち」をモデルとして、現任校をそのような集団にするために自分自身ができることはなんだろうか、してきたことはなんだろうか、と問い直しながら語ったことで、自分自身の考えが語りを通じて整理されていった実感がある。

二つ目は継続して参加した取り組み、ラウンドテーブルの ZoneE 「NEW NORMAL PROJECT 2.0 評価・受験のニューノーマルをデッサンする」に参加したことである。この取り組みは生徒の活動が極めて活発で、自分自身が課題としている実践コミュニティの理想的な在り様のひとつが目前で展開されているように感じられた。そもそもの取り組みとして、2月のラウンドテーブル当日だけがイベントなのではなく、語り合いを通して行われる長期的なプロジェク

トの一部として、デザインされていることそのものが素晴らしい。打ち上げ花火を上げて終わるような行事ではなく、継続的なプロジェクトにすることで参加者の行動変容を促したり、参加者が自分自身の取り組みや実践を省察する機会となっていると感じた。また、このプロジェクト自体が6月のラウンドテーブルで提起された問題に関する話し合いから生まれてきたものであるということからも、学びのつながりと、ダイナミズムが感じられる。金沢大学附属高校の生徒がホスト役として開催した 3rd COLLABORATIVE INQUIRY MEETING hosted by KANAZAWA 協働探究「よりよく生きていくために必要な“能力”とは？」に参加して、校内の枠組みを超えて既に自分自身のコミュニティを広げ、継続して関わり続けている有様を見ると、学校という枠組みの中に生徒を位置づけるのではなく、生徒の生活の一部に学校がある、というイメージで生徒に関わっていくことが良いようにも思う。

個人的な課題としては、ラウンドテーブルに周囲の人を巻き込めなかったことが挙げられる。教職大学院で学びを深めることは個人の取り組みに留まらず、ラウンドテーブルが生徒の学びを喚起しながらメンバーを増やしていくように、共に学ぶ仲間を増やしていく形で進めるべきことだと考えている。今回のラウンドテーブルについては、生徒への声掛けは行ったものの、本校から参加した生徒は5名、教職員にはあまり周知もできなかった。次年度は、この人数を少しでも増やすことを目指したい。

2月ラウンドテーブル参加から考えたこと

学校改革マネジメントコース1年／高浜町立高浜小学校 松見眞希

今回のラウンドテーブルへの参加も非常に意義深く学びの多いものであった。特に、最初の話題提供では、令和3年1月に取りまとめられた「令和の日本型学校教育の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」についての解説をお聞きした。

「Society5.0時代の到来」や「新型コロナウイルスの感染拡大など先行き不透明な時代」など、まさに予測困難で急激に変化する時代の中でこれまでの日本型教育の成果と課題を整理し、「令和の日本型教育」の実現を目指すものとしており、その具体的な姿として①個別最適な学び②協働的な学びを挙げている。

個別最適な学びは学習者の視点に立った指導の個別化、学習の個別化であり、教師視点でいう個に応じた指導を指し、GIGAスクール構想の実現による新たなICT環境の活用や少人数によるきめ細やかな指導体制の整備を進めると共にこれまでの実践との最適な組み合わせ（＝ベストミックス）を模索し、実現していかなければならない。また同時に個別最適な学習が孤立した学びに陥らないよう、探究的な学習や体験活動を通じて多様な他者と協働しながら互いに尊重し、共に課題解決していける主体的な社会の担い手を育成する意識が必須である。このような、ICTを活用する技術と他者とコミュニケーションをとりながら協働する力は一見方向性が異なるようにも思えるのだが、実は全くそうではないと言える。子供たちが人とのつながりを大切なものと感じたり、意義あるものと認識したりしながら人につながる意欲を育てていくことは、これまでから取り組んできた普遍的な価値であり、ICTの活用と矛盾するものではない。ICTの活用による個別最適な学びはさらに発展し、各自のペースで力を身につけ、さらにそれによって世界の人たちとつながって共に課題解決に取り組んでいくことも可能にするだろう。

実際にはそのためには、我々教員のICT活用のためのスキルの向上がますます必要となり、それは「やらされ感」に通じると教職員の負担感にも直接つながるものである。しかし私たちはこの先行き不透明な「コロナ禍」の休校を経験し、どんな時も子どもたちと繋がり続けること、どんな時も学力保障を続けることがどれほど大切な学校の役割であるかを学んだはずである。まずは私たち自身が、何事にも主体的に、やってみよう、挑戦してみよう、と柔軟に対応する姿勢を示し続けることが子供たちの未来を切り開く道標となるのではないだろうか。そしてそのために人と繋がって協働し共に挑戦していくことで得られる成果や喜びは2倍にも3倍にもなることを私たちは知っている。そして私たちの価値観は子どもの生きる意欲や姿勢に直結すると私は信じている。このように質の高い教育をすべての子どもに保障しつつも私たちの働き方改革を共に実現していかなければならない。働き方改革と質の高い教育はまるで矛盾することのように思われるかもしれないが、私はそう思わない。質の高い教育を実現することは私たちの働き方を必ず変えてくれると信じている。例えばICTの活用により、授業の中で個別指導が実現していけば、「居残り」などの個にかける時間が減っていくのではないだろうか。また個別の課題に未然に対応できるよう、ヒューマンリソースを効果的に働かせながら組織力を動かしていけば、問題が起きてからの対応に時間や労力を注ぐ必要がなくなるのではないだろうか。子どもの学びの保障や支援の充実が私たちの働き方に直結している。しかし「問題が起これない状態」がどれほど子どもたちばかりでなく私たちにとっても価値があるか、ということになかなか私たちは気がつかないのだ。本話題提供から、働き方改革と質の高い教育について深い示唆を得たように私は感じた。私たち教師の主体的に挑戦する姿、良い仲間として日々働き、協働して課題解決してい

こうという姿が子どものその姿に反映される。子どもに求める姿に私たちがまずなっていくことを目指した学校文化を創造することが必要である。

February Round Table Report

ミドルリーダー養成コース1年／小浜市立小浜第二中学校 Tjipto, William

The February Round Table conference was the second meeting of the new year, but one of the last of my first year in the Fukui University program. Over the course of two days, I joined Zone E New Normal Project 2.0 in Japanese on Saturday and Zone D in English on Sunday, so I had a bit of a different experience in both meetings. Zone E was a varied discussion about education during our current COVID-19 pandemic. I was amazed to see two members of our discussion group were high school students. The students involved were very engaged and well-spoken, despite talking among a group of experienced teachers. Most of the topic and the groups' questions focused on asking the two students in our group their opinions and discussing their ideas. It was difficult for me to follow along with the days' topics, however, the teachers were supportive of me in the discussion and one of the teachers added notes to the shared slideshow so I could read and understand the points clearly and visually. I contributed a few questions that were relevant to me: How can we improve and facilitate classes using more English? How can we encourage quiet students to participate? I was glad to see the second question in particular further spurred discussions. The Zone D meeting was an important one for me. Having listened to the second year student's presentations and reports in January, it was time for the first year

students to report on their progress. I was nervous regardless of the language, but the teachers attending were a wide range of experienced educators from all over the world. My presentation started with discussing my background in America so that everyone could understand where I was coming from, then discussing my teaching history, but especially what I had learned over the year. The comments and feedback from such a varied group were helpful and made me reevaluate how I can improve my teaching projects in the future. There were three other presenters, but the one most interesting to me was Yuni's presentation. She ran into the problem of trying to encourage student participation, so she approached it very methodically, researching, implementing, and reevaluating. In the end, she realized that there was not one perfect way to involve more participation. While it was only one facet of her teaching progress, that snapshot taught me many things. I finished the day invigorated from what I had heard, reaffirmed about my progress, and knowing that I have new ideas that I could readily apply to my classes. This once again showed me the value of the teaching community, as I was supported by other teachers and I learned so much from others in these discussions. I am eagerly looking forward to my second year and building upon my progress as an educator

実践研究 福井ラウンドテーブル 2021 Spring Sessions に参加して

学校改革マネジメントコース1年／東京大学教育学部附属中等教育学校 対比地覚

「やはり『学び』は他者の存在あってこそ！！」そう再認識できたことが、今回のラウンドテーブルにおける一番の収穫でした。ある程度であれば独りで学び進めていくことも可能と思われませんが、自らの習慣的な認知システムから離れて物事を捉えることはなかなか難しい。古い殻を抜け出し、新たな自分に脱皮すべく進んでいたつもりが、いつの間にか慣れ親しんだ世界に戻って“いつも通り”のやり方を繰り返してしまっていたことにまたまた気付かされました。一日目のゾーンセッション「探究」を一緒に進めた他校の高校生からは、普段、教師（＝自分）が生徒からどのように見えているのか、何を求められているのか、また生徒はどんなことを感じ、考えているのかリアルな声を聞かせてもらい、自分が相対（あいたい）していると思っていたのは現実にはいない“想像の生徒”であること、またその実際の生徒とのズレ（乖離している点）について学びました。ラウンドテーブルに参加してくる高校生という点も考慮に入れる必要はありますが、私が見えている以上に生徒は大人で、教師を尊重・理解しようとしており、同時に（反発するだけでなく）一緒に物事を前に進めたいと思っていること、信頼して任せて欲しいと思っていることがわかり、もっと失敗できるように挑戦できる環境を整えてやらなければと思いました。これは、学校改革マネジメントコースにおいて私が取り組んでいる研究テーマに通ずるものがあり、勤務校において、対話の時間を捻出できるよう「やるべきこと」「勇気をもってやめるべきこと」を整理し、生徒を学校運営に今より少し引き入れる仕組みを考えることで、ステークホルダー全員にとって **happier** な学校が実現するのではないかと楽しみになりました。

一方、二日目の実践報告会の中で教職大学院の先生や大学院生から頂いた問いや報告も、安住の地で眠る私を揺さぶり、夢を見ていたことに気付かせる

のに十分な破壊力をもっていました。コンテクストを共有しない（さらに利害関係が生じない）からこそ、新鮮な気持ちで聞かせてもらえるとともに、ありのままを言えることで、客観的に自分や取り巻く状況を理解することができました。一つひとつ説明しなければならぬため、阿吽の呼吸でスムーズに物事を進められないもどかしさがある分、質問に答える形で説明していく中で“当たり前”と思って見過ぎていた部分にちゃんとスポットライトが当たり、視界にありながら今まで見えていなかったものを認知することができました。まだまだ努力の余地がたくさん残されていることが分かったことで、希望とともに焦りも生まれ、次年度はもっと気軽に誰かと話す機会を努めて（＝遠慮せず）持とうと反省しました。その際、教員の性も手伝ってか「言っていることの正しさ（正しいことを言う）」や「即答できること」を重視してしまいがちな自分にブレーキをかけ、できるだけ「虚心坦懐に聞くこと」「自分の心の声に静かに耳を傾けること」に意識を向けることも大切になってくると自覚しました。

昨今、「今度の学習指導要領では協働的な学びも取り入れなければならず大変だ」「協働的に学ばせるって、どうすればいいのだろう」という声をよく耳にしますが、以上のことを踏まえると、もともと学びは協働の中でこそ生まれてくるもののように思います。広い意味で言えば「本」も他者の一つになるのかも知れませんが、天才でもない限り、読書（独学）を通じて温故知新、新たな知の世界に気付き・築くのは困難を極めます。VUCA の時代、私たち一人ひとりがそれぞれに必要な新しい知を生み出し、生きていくために、双方向的に知を交わし鍛錬させていく「対話」に勝る学びはないように思います。

いつも長期にわたる視点で実践を振り返り、語ることの意義について説明して下さっていますが、

正にその難しさと重要性を改めて実感する（＝スト
レートに聴く）ことができた2日間でした。

実践研究 福井ラウンドテーブル 2021 Spring Sessions

兵庫県立御影高等学校／ミドルリーダー養成コース2年 土居亜貴子

ラウンドテーブルの醍醐味は、異校種かつ異地域の先生方とじっくりと語り、聴き合うことではないでしょうか。今回のクロスセッションでは、福井市内の幼稚園や沖縄の離島の中学校で働く先生方と、神戸市内の高校で働く私という少人数のグループでそれを満喫することができました。

オンライン上でのセッションでは、語り手が一方的に話してしまうという状況になりがちですが、私を含めて3名という小さなグループだったため、マイクをミュートにせず、ふと浮かんだ疑問を口にすることもできるような温かい雰囲気だったことがありがたかったです。提供された話題をきっかけにして、それぞれの実践について情報交換をしたり、感じ考えたことを共有したりといったことが円滑で、非常に楽しい時間を過ごすことができました。また、オンラインだったからこそ、福井・沖縄・兵庫という遠く離れた場所にいながらも同じ時間を過ごすことができました。

もっとも印象深かったのは、新型コロナウイルスがまだ上陸していない島の中学校と、クラスターが発生して臨時休校を余儀なくされた私の勤務校との違いでした。中学校と高校は似ている部分が多いのですが「地域の違い」でこれほど違ってくるのかという新鮮な驚きと学びがありました。

また、かわいらしい幼稚園児の姿を見せていただいたことで「高校の教員が幼児教育から学ぶことは

多い」という思いを新たにすることもできました。連合教職大学院で出会ったデボラ・マイヤーの『学校を変える力』には、「家庭や遊び場ではよく聞かれる子どもたちの自信に満ちた声が、なぜ学校では聞こえなくなってしまうのだろうか？」という問いが登場します。高校でも、子どもたちの自信に満ちた声を聴きたいのです。そのためには、幼稚園で大切にしている視点を高校にも取り入れていくことが必要なのだということを改めて感じました。

立場が異なる人たちと語り合う時間は、1日目のZone E 探究（学びと教えのニューノーマルを協働探究する）でも多く持つことができました。Zone Eは、昨年6月の福井ラウンドテーブルで新しく立ち上がり、子どもたちの声に耳を傾けながら教育のニューノーマルについて考えていくというものでした。結論を導き出すことよりも話し合う過程を大切にしており、様々な思いを聴くことができました。高校生が主体になり、教育における「ニューノーマル」について、現状分析や私たちにできることを考えたりしたこの時間は、とても充実したものになりました。そして、日頃向き合っている目の前の生徒たちとも、こういった話し合いをする時間を持ちたいという思いを抱くようになりました。

多様な人たちと、じっくりと語り、聴き合うことができたこのラウンドテーブルに参加できたことに感謝しています。

ラウンドテーブルに参加して

ミドルリーダー養成コース2年／福井県立羽水高等学校 永田卓裕

1月某日、2月のラウンドテーブルで話すための資料を準備し始めた私は、ふと1年前のラウンドテーブルで私のポスターセッションを聞いていただいた方が撮っていただいた写真を目にした。教育棟の2階フロアの端から撮られたその写真には、廊下の奥までずらりと並んだパネルが見えなくなるほどの参加者がパネルを囲む姿が映っていた。今で言う「3密」という状態なのだろうが、わずか1年後にこうして見ると、今まで当たり前だった状況がこれほどに異様な光景に見えてしまうことに、社会の急激な変化に対し恐怖感すら覚えた。

同時に、勤務校でも様々な行事等が中止や規模を縮小しての実施を迫られた中で、オンラインという形式をフルに活用して、例年通りの規模や熱量を保ってラウンドテーブルを開催していただけることに感謝の念を覚えた。6月のラウンドテーブルもそうであったが、社会状況の変化にうまく対応し、現状の中でコロナウイルス感染症の対策を取りながら、これだけのイベントを準備された福井大学のスタッフの方々に感謝したい。

さて、私がラウンドテーブルに参加するのはこれで8回目だと記憶しているが、毎回2日目のセッションでは、それまで知る由もなかった素晴らしい実践者の方々の話を聞かせていただいた。しかし今回は、今までにない貴重な機会をいただいた。それは、自分が送り出した生徒が福井大学教育学部の学生として参加し、同じグループになったことだ。今回のラウンドテーブルは、私が教職大学院生として参加する最後の機会となったため、もちろん私が話そうとしていたのはこの2年間私が勤務校で取り組んできたことや教職大学院での学びであるが、その主体は常に自分が見てきた生徒たちであった。そのため、そのような話をまさに自分の教え子にどう思われるか、楽しみであり不安でもあった。

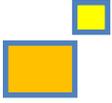
そのような気持ちを持ちつつ迎えたラウンドテーブル2日目当日。私が約3時間のセッションで最も興味深かったのは、自分の実践に対する教え子からのフィードバックではなく、むしろ大学進学後も探究を通して成長し続けている教え子の姿であった。彼の実践発表の中心は探求ネットワークの活動に関するものであった。大学2年生として探求ネットワーク2年目の活動をふり返った報告には、今年ならではのコロナ禍との戦いが詰まっていた。1年次には子どもとの関わりを重視していたが、2年目を迎え3年生が不在の中でブロックや探求ネットワーク全体の運営なども考えなければならぬ立場となったという。そんな難しい中でも仲間たちと助け合いながら、現状の中でなんとか今できることを探りつつ実践を続ける彼の姿を、私はここ2年間の自分と重ねながら聞いていた。実際に会えない子供たちのためにオンラインで実施できたことに喜びを感じつつも、小さな子供たちがハサミを使う際に直接指導ができないなどの課題を見つけ、次の実践に向けて試行錯誤し続けているという彼の話を聞きながら、自分がこの2年間挑戦と失敗を繰り返してきた姿を重ねた。

「探究心」や「探究力」とは何かと尋ねられることがある。私自身、「探究」というものを意識し始めて5年が経つが、未だにその質問に明確な答えを出すことはできない。しかし5年間で気づいたことを1つだけ述べるとすれば、探究が面白くなくなった時にはそれ以上そのまま続けるべきではないのだろう。自分自身だけでなく、その実践に関わるあらゆる人が、面白いと思うことでなければ続かないし、やる気も起きない。だからこそ、自分の実践や挑戦、そして人生を楽しく・面白くする力こそが探究する力なのかもしれない。そのフィールドが学問であれ、地域課題であれ、地球規模であれ、自分のキャリアであれ、現状の課題と向き合い、その解決に向けての実践を

いかに楽しいものにデザインできるかが、その人の探究力なのかもしれない。

話をラウンドテーブルで話した卒業生に戻す。この2年間の実践を進めることが彼にとって簡単なことでなかったことは、彼の語りからも感じた。しかし、

探求ネットワークでの経験を踏まえ次年度は更なる挑戦をしたいと意気込む姿からは、自分の学びを楽しくできる自信があるように感じた。これが探究心なのかもしれない。



マネジメントコースだより

※所属・学年等は 2020 年度のものです。

As in the Classroom, So Does in School

学校改革マネジメントコース1年／福井大学附属義務教育学校

Michael Wilson I. Rosero

I am Michael Wilson Rosero, currently, a first year graduate student of the Department of Professional Development for Teachers' (DPDT) School Reform Management Course. In the Philippines, I used to work as a project staff in the Department of Education. I joined the DPDT graduate program to immerse myself and experience firsthand the Japanese education system; learn how students, teachers and school leaders learn. I am interested, specifically, in how teachers develop reflective practices, how school leaders and the entire school community cultivate learning communities that support these practices and how this translates to quality teaching and learning.

As part of the DPDT graduate program, I interned at Fuzoku Elementary School, an attached compulsory education school of the University of Fukui. I was assigned to observe and assist in the Grade 1 class three times a week (Monday, Tuesday, Friday). I observed the following subjects: Japanese language (国語), foreign language (外国語), morals

(道徳), physical education (体育), community/social creation (社会創造), calligraphy (書写). I also observed and taught Grade 6 and Grade 5 English classes.

In this article, I would like to share my observations, musings and reflections during my first year of internship at Fuzoku Elementary School and how I put it into practice in my first-time of teaching elementary classes, which I also shared during Fukui February Roundtable discussions.

Observations, Musings and Reflections

As part of my internship, I was assigned to teach Grade 5 and Grade 6 classes of my mentor. I was tasked to teach a unit and this included designing of the lesson plan, preparation of materials and actual teaching of the lesson.

In designing the lesson plan, it was important to start from where the students were – their interests, the things they were familiar with and their immediate experience, such as the food they ate

recently or their favorite food, anime characters they know and the food they usually eat. I incorporated certain aspects of the Japanese culture, such as the food mascots in different prefectures and the products they represent, prefectures and the products they produce. I tried to bring in my perspective and character as a foreigner by integrating my own culture. For instance, I realized that the rock-paper-scissors game played an important role in Japanese kids' lives so I introduced them the Philippine version. My mentor told me that the students enjoyed it even though they were wary of the introduction of foreign cultures.

In the delivery of the lesson, I learned, as the lesson progressed, to provide the students more opportunities to practice the target sentences. May it be through the repetition of the target sentences, asking them to participate in the class discussion, and engaging them in a game. Gradually, I was able to break away from my old teaching habits that I developed as a lecturer and a teacher trainer. At first, I spent a lot of time talking and this made students lose interests and enthusiasm. It felt dragging for me as well as it seemed that I was forcing them to participate and that I needed to exert more energy and effort. Talking less means more time for students to learn on their own and with their classmates.

Students were more engaged when they were moving around, interacting with their classmates and not just sitting down, listening to the teacher talked. It can be observed through their body language that they were learning while having fun. They talked about the things that were related to the theme, such as their favorite food, the food they ate, the restaurants they visited, the prefectures where certain products can be found.

As their teacher, my role was to design activities and ensure that they understood what to do. My mentor always reminded me it was better to show the students how to do the activity first, then explain the instructions. Further, as one of the observers in my class suggested, I learned how to let the students take my role. For example, in choosing the number of the student who will share their answer or read the sentence, I can make the student choose themselves. By using this approach, it would come from them and it would not feel like it is forced.

I also considered what my blackboard would like. It was important as the blackboard would serve as a record of the progression of the lesson. I took into account where I should write the topic/question, the target sentence, the new vocabulary words and how I would put other materials such as pictures. In the Philippines, teachers and students alike have gotten used to the utilization of PowerPoint slides and other information and communication technology (ICT) materials and rarely use the blackboard. Although there are still experienced and seasoned teachers who write on the board, Filipino teachers prefer using visual materials or PowerPoint presentations, as they are expected to use ICT in teaching. Teachers seldom write on the board and use it to post visual aids, such as pictures.

In my observation of the Grade 1 class, I saw how my mentor used the blackboard methodically. She used it to write the topic and the target sentences, to record students' answers, to introduce new vocabulary words. This way, the blackboard helped students see the connection between different parts of the lesson, remind the students what they need to do and think about the lesson in one glance.



Main Takeaways

Teaching at Fuzoku Elementary School was a rather interesting teaching and learning experience. Although I already had previous teaching experiences as a lecturer in a University, I considered being an elementary school teacher a more challenging task. When teaching elementary students, there was an added pressure to keep them engaged, thus the need for varied and differentiated activities. It was also my first time to teach English as a foreign language and I anticipated that there will be more barriers to communication that I need to overcome, not just in terms of language, but as well as interpersonal/intrapersonal ones.

As it was my first time to teach elementary students, I also had no practical experience of designing and delivering ELT activities. All I had was the theoretical knowledge and the expectations of what the teacher should know, be able to do and value. I had to compensate for it with research. I read up on different ELT games and watched videos of them and carefully considered whether they could be used appropriately in my class. Observing the Grade 6 and Grade 5 classes helped me become familiar with the classroom routines and get acquainted with students' certain habits.

In my one year of observing and teaching at Fuzoku Elementary School, I had two main takeaways. First, I should not be afraid of teaching because I am not really alone when I teach. I always

have this view of teaching as a profession where a certain individual can greatly influence the lives of many people, either directly or indirectly. Although I came from a family of educators, I initially didn't want to end up as another teacher in the family. However, during my internship at Fuzoku, I always have my students, co-teachers and my professors/mentors.

I consider myself lucky to have such energetic, cooperative and participative students. I have only been with them for three months but I learned a lot from my interaction with them. Whenever I was confronted with a hurdle, such as when some students did not understand what I was saying, there were students who would translate the keywords so they could keep up with the lesson.

My communication with my co-teachers was as important. To ensure that all teachers in the class know their roles in facilitating the teaching and learning process, I prepared a script outlining the expectations from the main teacher, the Japanese English teacher (JET) and the assistant language teacher (ALT). The day before each meeting, we discussed the lesson plan and script and made necessary adjustments to my lesson, materials and activities based on their comments/feedback.

It was during one of my consultations with the ALT that I got the idea what to do for the final presentation. She mentioned that the other English class were planning to make a Go To Eat set meal in

the context of the Tokyo 2020 Olympics. Although I was still considering a few options, I decided to adopt their idea, thinking that it was also timely. The ALT also helped me in the finalization and preparation of materials. I often brainstormed my ideas with her and she provided me valuable insights. It was also the case with the JET. She always reminded me to think of the different kinds of students in the class, as there were fast learners and slow learners. She also advised me to consider designing the activity in a manner that it will encourage the students to think on their own.

After the lesson, I elicited their comments and reflected on them. This helped me further review my lesson plan, reconstruct my activities and improve on the delivery of the lesson. As observed by one of my professors, the harmony between us was smooth. When students needed more explanation, the JET was quick to provide elaboration. Further, when students were kind of lost or did not move, the ALT encouraged them to move.

Lastly, I was equally grateful to my professors who attended and observed my class. They offered me valuable suggestions and insights regarding my practice. They generously pointed out the things that I missed and provided me advice on how to improve on them.

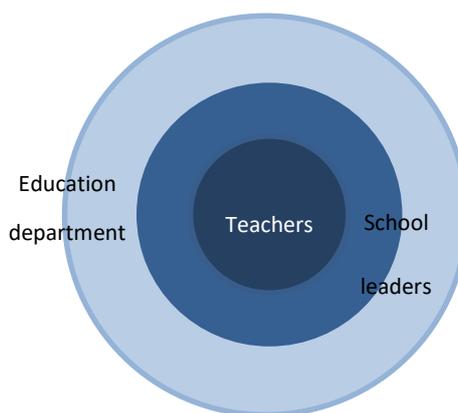
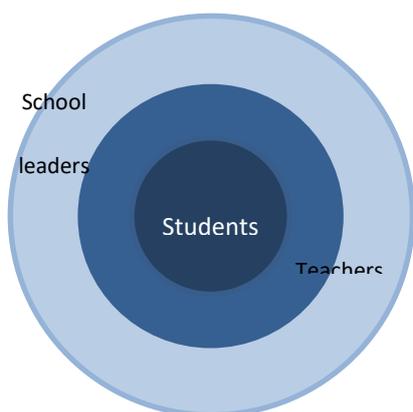
This leads me to my second takeaway: Teaching is learning and growing with your students. I particularly liked what one of the participants said

during one of the monthly conferences, “Teaching should not be a difficult thing. It is not about being perfect. It is about being with children and growing with them.” This struck me and changed my perspective about the teaching and learning process.

Moving forward

During my first year as an intern at Fuzoku Elementary School, I watched and documented how learning took place inside the class, how teachers and students learned from each other and how the entire school and the community was involved in the student learning process.

Now that I have been more involved inside the classroom as a teacher than I have been as a research staff of the education department, I can see that there are parallels in the teaching and learning process of students and the professional development of teachers. Teachers must be able to recognize the needs and interests of students in order to provide them the best instruction allowed within their resources. School leaders, on the other hand, must be able to identify teachers’ needs in order to support their professional development. School leaders and education executives, who are in-charge of overseeing the school and education system, respectively, must ensure that mechanisms and structures are in place to encourage learning.



『教師教育研究』13号を読んで

※所属 2020 年度のものです。

教育行政の役割とは ～教師教育研究 13号を拝読して～

福井県総合教育研究所 朝倉 智子

行政職に転じて約2年、現場で生徒を目の前にしていた時は考えたこともなかったことに意識が向くようになった。標題の問いもその一つである。今回は所属する県教育総合研究所と関わりの深い3本を拝読し、僭越ながら感じたこと・考えたことを書きたいと思う。

最初に血原先生の「福井県教育委員会と共催して3年目、教員免許状更新講習の一考察」を拝読した。私はかつて福井大学で教員免許状更新講習を受講している。共催以前のことである。新任教頭研修とタイアップし、校種・年代を混ぜてのグループ協議はとても新鮮で、「やるからには現場で役立つものにしたい」という大学側の気概を感じた。しかし、金銭的・時間的な負担が他大学と比して大きく、地元大開催にもかかわらず、現場の教員の中に敬遠する空気があったことは否めない。3年前に県教委との共催となり悉皆研修に組み込まれたことで、負担が軽減されたことはもちろんだが、同期採用の県内教員全員が顔を合わせ、お互いの成長ぶりを目にして刺激を受けられるようになったことは、大きな意義があると考え。福井大学教職大学院の重視する「実践」「省察」を地で行く研修になっていると思う。

コロナ禍に見舞われた今年度は、本所の担当者を見ていても、運営上の負担が大きなものであったと感じている。今年度の免許状更新講習については、淵本先生の「コロナ禍の中における福井大学連合教職大学院の実践と省察」(I-10「県教育委員会と共同開催の免許更新講習の危機」)に詳細が記載されてい

て、こちらにも拝読した。「オンライン」という時代に合わせた方法を選択しながらも、福井大学が大切にしてきたカンファレンス重視の信念は曲げず実施されたことに、心からの敬意を表したい。受講者の高い評価からも、大学側の意図がしっかり伝わっていたことが見て取れる。

淵本先生の文章の中から、印象に残っている一節を引用させていただく。

教育行政や教員養成大学は、現場の教員を支援することを何よりも重要視すべきである。現場をリスペクトすることなく、次々と命令を出していれば、教育行政と学校現場との心理的な距離は広がり、溝は深くなるばかりであろう。

(P.264)

今年度、教職大学院のスタッフとしてカンファレンス等にも関わってきたが、県外の院生から、福井県教委と福井大学の密接な関係に驚く声がよく聞かれた。教育行政は、大学等の専門的機関から「知見」という応援をいただきながら、「縁の下力持ち」として現場の教員を支える仕事であるということを改めて感じる事ができた。(現場からはそのように受け取られていないことが辛いところであり、改善が必要な点もまだまだあるとは思いますが…。)

もう一つ、教育行政の重要な仕事として、次の時代を担う教員を育成することが挙げられる。もちろん教員は現場での経験を積み重ねながら成長していくものであるが、その根幹となる理念を作るのは、やはり教育行政の仕事であろう。上記の免許状更新講習

はもちろん、本所が担っている研修の数々も、重要な役割を果たしていると実感するようになった。

3番目に水野先生の「教員研修と組織マネジメント」を拝読した。昨年度、水野先生が講師を務められた「ミドルリーダー養成研修」を所内で見学していたので、興味深く読ませていただいた。水野先生が元校長・教育行政経験者というお立場を踏まえ、どのような考えでこの講座に取り組まれていたのかということがとてもよく分かった。

教員の大量退職時代を迎え、教員の育成が急務になっている。「育てる」というとどうしても経験の浅い若い教員に目が向きがちになるが、ある程度経験

を積んだ立場から学校運営に携わる教員を養成することもまた重要である。

管理職を含め教員一人ひとりの役割、各組織の役割等々、すべてが円滑に機能してこそ学校が成り立つのだということ、そしてその下支えをするのが教育行政の役割であるということ、少し離れた立場から学校現場を見るようになって、そして教職大学院のスタッフを務めたことによって理解できたように感じている。学校現場に戻った際に、これまでとは違った見方で、教員を、学校を、ひいては教育全般を見ることができるようになっていないかと、自分自身にも期待したい。

2021年度 福井大学大学院連合教職開発研究科 年間計画 (案) 2021.3.10現在			
4	1 木	1 木	1 金 後援授業開始 遠隔カンファレンス
	2 金 12:50-14:10 (授業実習・教職専門性研修コース)	2 金 遠隔カンファレンス	2 土
	3 土	3 土	3 日
	4 日	4 日	4 月
	5 月	5 月	5 火 4系授業
	6 火	6 火	6 水
	7 水	7 水	7 木
	8 木	8 木	8 金 遠隔カンファレンス
	9 金 遠隔カンファレンス 12:50-13:00	9 金 遠隔カンファレンス	9 土
	10 土	10 土	10 日
	11 日	11 日	11 月
	12 月	12 月	12 火 4系授業
	13 火 4系授業 (4系履修P1申込締切) 12:30-18:45	13 火 4系授業	13 水
	14 水	14 水	14 木
	15 木	15 木	15 金 遠隔カンファレンス
	16 金 遠隔カンファレンス	16 金 遠隔カンファレンス	16 土
	17 土	17 土	17 日
	18 日	18 日	18 月
	19 月	19 月	19 火 4系授業
	20 火 4系授業	20 火	20 水
	21 水	21 水	21 木
	22 木	22 木	22 金 遠隔カンファレンス
	23 金 遠隔カンファレンス	23 金	23 土
	24 土	24 土	24 日
	25 日	25 日	25 月
	26 月	26 月	26 火 4系授業
	27 火 4系授業	27 火	27 水
	28 水	28 水	28 木
	29 木	29 木	29 金 遠隔カンファレンス
	30 金 遠隔カンファレンス	30 金	30 土
1 土	1 土	31 日	
2 日	2 日	1 月	
3 月	3 月	2 火 4系授業	
4 火	4 火	3 水	
5 水	5 水	4 木	
6 木	6 木	5 金 遠隔カンファレンス	
7 金 遠隔カンファレンス	7 金	6 土	
8 土	8 土	7 日	
9 日	9 日	8 月	
10 月	10 月	9 火 4系授業	
11 火 4系授業	11 火	10 水	
12 水	12 水	11 木	
13 木	13 木	12 金 遠隔カンファレンス	
14 金 遠隔カンファレンス	14 金	13 土	
15 土	15 土	14 日	
16 日	16 日	15 月	
17 月	17 月	16 火 4系授業	
18 火 4系授業	18 火	17 水	
19 水	19 水	18 木	
20 木	20 木	19 金 遠隔カンファレンス	
21 金 遠隔カンファレンス	21 金	20 土	
22 土	22 土	21 日	
23 日	23 日	22 月	
24 月	24 月	23 火	
25 火 4系授業	25 火	24 水	
26 水	26 水	25 木	
27 木	27 木	26 金 遠隔カンファレンス	
28 金 遠隔カンファレンス	28 金	27 土	
29 土	29 土	28 日	
30 日	30 日	29 月	
1 月	1 月	30 火 4系授業	
2 火 4系授業	2 火	31 水	
3 水	3 水	1 木	
4 金 遠隔カンファレンス	4 金	2 木	
5 土	5 土	3 金 遠隔カンファレンス	
6 日	6 日	4 土	
7 月	7 月	5 日	
8 火 4系授業	8 火	6 月	
9 水	9 水	7 火 4系授業	
10 木	10 木	8 水	
11 金 遠隔カンファレンス	11 金	9 木	
12 土	12 土	10 金 遠隔カンファレンス	
13 日	13 日	11 土	
14 月	14 月	12 日	
15 火 4系授業	15 火	13 月	
16 水	16 水	14 火 4系授業	
17 木	17 木	15 水	
18 金 遠隔カンファレンス	18 金	16 木	
19 土	19 土	17 金 遠隔カンファレンス	
20 日	20 日	18 土	
21 月	21 月	19 日	
22 火 4系授業	22 火	20 月	
23 水	23 水	21 火 4系授業	
24 木	24 木	22 水	
25 金 遠隔カンファレンス	25 金	23 木	
26 土	26 土	24 金	
27 日	27 日	25 土	
28 月	28 月	26 日	
29 火 4系授業	29 火	27 月	
30 水	30 水	28 火	
		29 水	
		30 木	
		31 金	

Schedule

4/25 Sat.-26 Sun. 4月合同カンファレンス A 日程 **5/1 Sat.-2 Sun.** 4月合同カンファレンス B 日程
5/22 Sat. 5月合同カンファレンス A 日程 **5/29 Sat.** 5月合同カンファレンス B 日程
6/19 Sat. -6/20 Sun. 実践研究福井ラウンドテーブル Summer Sessions 2021

【 編集後記 】

ニュースレター144号をお届けいたします。この号は2021年度の最初の発行ですが、2020年度を締めくくる号となっております。編集スタッフの思いを込めて、編集後記を書きました。少しばかり長くなりますが、ご容赦ください。

2019年度末からの、感染症の世界的な流行の中、日本も、本連合教職大学院も、大きな影響を受けることになりました。それに伴い、ニュースレターの発行についても、大きな変更、変化がありました。

再出発カンファレンスの開催を断念せざるを得ない中、これに替わるものとして、修了生、在籍生、スタッフの皆様幅広く原稿を公募し、2号に分けて、特集号として発行しました。それぞれの方がそれぞれの場所で、この事態をそれぞれに受けとめて、次に向かおうとする姿が浮かび上がってくるものとなりました。編集作業をしながら、何度も胸が熱くなりました。お忙しい中、原稿をご執筆して下さいの皆様、ありがとうございました。

カンファレンス等がオンライン開催になる中、定例のニュースレターの発行スタイルも変化しました。これまで毎月のカンファレンスや夏や冬の集中講座など、院生・スタッフの皆様が直接顔を合わせる場に、印刷されたニュースレターをお届けしてきましたが、メール添付での配信となりました。しかし、ニュースレターをお届けする、一つの形ができたとも考えるようになりました。なぜならば、日本全国に院生の方がおられ、オンサイトの会場も複数となり、オンラインを併用したカンファレンスや集中講座が今後とも展開されていくことでしょう。できたてほやほやをお届けするには、この配信スタイルもいいと考えるようになりました。

ニュースレターは書く作業による「振り返り」（省察）を、多くの方と共有する場所です。個人的な記録や、読み手を限定したレポートではなく、ニュースレターは多くの方が読みます。省察が公共の場に拓いているということです。わたしたちの学びは社会の学びとなることだと思いました。皆様の深い振り返りが詰まっているニュースレターだからこそ、自分たちが公教育の担い手であることを、実感することができました。

編集に携わり、皆様の貴重な原稿の最初の読み手になることの幸せを感じつつ、公に発信するニュースレターを制作する責任も感じて作業をしてきました。しかし、発行の遅れや、表記上のミスなど、みなさまには御迷惑をおかけしてきました。深くお詫び申し上げます。

2021年度も、「振り返り」を共有する場として、ニュースレターの発行を続けて参ります。宜しく願いいたします。
(ニュースレター編集スタッフ一同)

教職大学院 Newsletter **No.144**

2021.4.3 内報版発行

2021.4.22 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dndtfukui@yahoo.co.jp
